彙報

昭和56年度定例会発表要旨

昭和56年
■5月27日
研究発表

近世における庶民信仰の動向

北村行遠
（史学科講師）

江戸時代ほとんどの人びとは，幕府の宗教政策によって氏神一氏子，檀那寺一檀家という関係で，神社と寺院に属し，各家には，地域の守護神である氏神を祀る神棚と，一家の代々の祖霊を祀る仏壇とがあり，人びとはそこで商売繁昌と家内安全を祈願し，日常的な信仰生活を営んでいたといえる。

ところが，江戸時代中期以降，消費を中心とする都市生活が広まるようになると，こうした氏神や祖霊だけを崇拝するのではことたりぬ宗教状況が現われてくるようになってきた。それは，都市生活を営む民衆の信仰に基づくもので，かれらの日常的諸側面より生じた雑多な信仰，いわゆる種々の現世利益に対する欲求である。

こうした民衆の現世利益の欲求に即応して，おもに都市を中心に神仏の霊験の分業という現象がみられるようになり，多彩な霊験をもつ神仏が祀り出されるようになってきた。

そして，そこでは神仏への願かけ番付や，神社仏閣巡拝の案内書などが大量に作られたりして，氏神祭りや小祠の祭り，勧進や開帳，縁日などに群参する民衆の姿をみることができた。

本報告では，こうした都市民衆の現世利益を中心とした信仰生活の中で，民衆の法華信仰がどのように展開していたのかを，江戸における日蓮宗寺院の開帳，および開帳を契機として作られることの多かった寺院の略縁起が語る祖師（日蓮）像をみることによって考えてみた。そして，次のような点を指摘することができた。

開帳については，祖師の霊跡に結びつく有名寺院を中心に，祖師像の開帳が展開されており，それは他宗に較べて盛んに，永続しておこなわれていた。また，略縁起が語る祖師像については，開運厄除・日切満願など種々に呼称される祖師像があり，そのどれもが霊験の役割を分担し，きわめて機能的に説かれている。

こうしたことから，法華信仰の人びとの信仰の基底には，祖師（日蓮）に対する信仰があり，前にみた都市民衆の現世利益の欲求に即応した神仏の霊験の分業化という現象が，ここでは日蓮という一人の傑出した宗教者に対する信仰を通して凝縮され賄われていたといえる。

学校施設研究の意義と課題

喜多明人
（教職課程講師）

我が国においては，学校施設の研究は，従来から一般建築学のレベルにおいてのみ行われてきたといって過言ではない。しかしながら，以下の点からこれを教育学の専門的一分野として位置づけ，研究していく意義を有すると考えられる。

第一には，各学校における実際の教育諸活動あるいは教育運営活動の可能性の幅が，学校施設の整備の如何によって現実的に規定されていることである。

第二には，以上の点とかかわって，そもそも，学校施設の機能，形態，位置などの諸条件が，児童生徒の学習意欲，生活意欲，安全性，心身の健康等や，教師の教授方法，生活指導方法等と，本来的に不可分な関係にある，ということである。

以上のとおり，学校施設の教育学的研究の必要性をふまえ，今後，施設整備経費などの経済性との調整のもとに児童生徒の“学習”の場，“生活の場”としてふさわしい施設環境づくりにとりくんでいくことが課題となろう。

■6月24日
研究発表

教員研修のしくみと問題点

浪本勝年
（教職課程助教授）

今日，学校教育に対する国民の期待は，その現実の荒廃状況（非行・暴力・学力低下等）に比例して大きくな